ウマン博士によって発見され、命名されたフォッサマグナ（大地溝帯）、その地層が地表に露出し、西南日本（西）と東北日本（東）の境目がはっきりわかる場所を見学。参加者は、地元ジオパークのガイドの説明に感動の面持ちで聞き入っていました。

ヒスイの原石に見入る見学者たち

このあと、「ヒスイとフォッサマグナの博物館」を見学し、巨大なヒスイの原石や古生代から中生代の岩石を並べたプロローグ部分を経て、「魅惑のヒスイ」「糸魚川大陸時代」「フォッサマグナシアター」などのブースを見て回り、5億年にもおよぶ糸魚川の大地の物語を学ぶことができました。

フォッサマグナとは…。ガイドの解説に耳を傾ける参加者

午後は、北陸自動車道、上信越自動車道をしばらく戻り、長野県の信濃町 IC を経て野尻湖畔にある「ナウマン象博物館」へ。

ナウマンゾウは、１万５０００年前ころまで日本各地に生息していたといわれる化石象類です。日本で発掘されたその化石を研究していたのが、フォッサマグナの名づけ親でもあるナウマン博士です。そこから「ナウマンゾウ」の名が付けられました。同博物館の近藤洋一学芸員は「野尻湖で 40 年以上続けられている“野尻湖発掘”の成果を中心に、約 5 万年の昔から現在に至るまでの、野尻湖周辺の自然環境を研究し、展示しています」と紹介。発掘された化石をもとに復元された実物大のナウマンゾウは背までの高さが 2.8 ㍍、今のゾウに比べると少し小型のゾウだったといいます。大きく曲がった象牙が特徴とのこと。また野尻湖からはオオツノジカの角の化石も見つかっており、迫力ある復元像も展示されています。このほか数多くの骨器や石器などが展示されており、それらを見学した後、実際に野尻湖畔の発掘現場も見てまわりました。参加者は、かつてこの周辺をゾウや大きなシカが闊歩していた話に興味津々の面持で聞き入り、太古の世界に想いを馳せているようでした。

博物館にはナウマンゾウなどの復元像が

野尻湖の発掘現場付近も見学

＊＊　～～～～～　＊＊＊　～～～～～　＊＊

秋の教養講座を開催

”古代東国文化について“ テーマに

”群馬の地質と岩石“

菅原久誠氏

郷土資料館が主催する教養講座が春に続き、この秋も開催されました。10 月 17 日に行われた講座は、県自然史博物館学芸係の菅原久誠氏が「群馬の地質と岩石」について講演。群馬の地質がどのように形成されたか、またどのような岩石で成り立っているのかなどの話があり、浅間山を中心とした各自治体とともに「浅間山ジオパーク構想」の実現を目指す嬬恋村にとって有意義な学びのひとときとなりました。

古代東国文化について熱く語る小林徹氏

一方、11 月 5 日の講演は、群馬県文化振興課の小林徹氏が「古代東国文化について」とのタイトルで講演。古墳時代を中心に、現在の関東地方は大陸や畿内の文化を積極的に受け入れて独自の発展を遂げ、栄えてきたと述べ、それが東国文化でありその中心的存在こそ“古墳大国”であった現在の群馬県だと強調しました。古墳の大きさや分布、出土品などからも、群馬こそ東日本で最も先進的で、最も強い勢力を誇っていたことがわかると語り、次代を担う子供たちへも、郷土への誇りと愛着をもってもらいたいなどと訴えていました。

ボランティアガイド会

中之条観光ボランティアセンターと交流

郷土資料館ボランティアガイド会では、11 月 11 日、初の対外交流として、中之条観光ガイドボランティアセンターを訪問しました。湯浅昌雄代表理事の案内でさっそく JR 中之条駅の待合室にある案内コーナーを見学、どのような活動をしているのかなどについて説明を受けました。ここには常時二人のガイドが午前 10 時から午後 3 時まで駐在し、同駅を利用する観光客の要望に応えて無料で町内観光スポットを案内するとのこと。

中之条駅でのガイドメンバーの活躍ぶりを視察

このあと、実際にガイドのひとりに、中之条町伊勢町の真田氏ゆかりの林昌寺を案内していただきました。ここには天明 3 年の浅間山噴火から 100 年目（明治 15 年）に建てられた被災者供養塔があり、これには初代群馬県令（知事）だった楫取素彦の名が刻まれていおり、一行は感慨深いものを覚えずにはいられませんでした。